

酒造好適米品種「とちぎ酒14」の栽培法

1. 試験のねらい

平成17年に奨励（認定）品種に採用された「とちぎ酒14」は、本県で初めて育成した酒造好適米品種であり、多収でたんぱく質含有率が低く、淡麗ですっきりとした味わいの酒が醸造できるという特性を持ち、作付け面積が拡大されつつある。

そこで、「とちぎ酒14」の特性を生かし、安定した高品質の酒米を生産するための栽培法を明らかにする。

2. 試験方法

- (1) 試験は平成16～17年に農業試験場本場水田(厚層多腐植質多湿黒ボク土)で実施した。
- (2) 供試材料は「とちぎ酒14」、比較品種として「若水」を供試した。
- (3) 試験は各要因を組み合わせて実施した。

要因	処 理		
基肥量 (N:kg/a)	0.4	0.6	0.8 (BB-F046使用)
追肥時期	出穂前15日	20日	25日
追肥量 (N:kg/a)	0.3 (BB-NK202使用)		

注) 1. 若水は基肥量0.6kg/a、出穂前20日追肥。
2. 基肥0.8kg/aの処理は平成16年のみ。

- (4) 耕種概要

移植時期は、平成16年は5月12日、平成17年は5月11日。各年次とも栽植密度は22.2株/m²、1株4本植とした。

3. 試験結果および考察

- (1) 基肥窒素量が増え、稈長が100cm以上になると倒伏が多くなり収量は減少した(表-1、図-1)。
- (2) 2カ年の結果では、追肥時期と収量・品質の関係は明らかではなかった。
- (3) 基肥窒素量が増加するにつれて、千粒重は低下した(表-1)。
- (4) 千粒重が大きくなると、心白発現率も増加する傾向がみられた(図-2)。
- (5) たんぱく質含有率は、基肥窒素量が多いと増加する傾向であった(表-1、図-3)。
- (6) 心白発現率は、基肥窒素量0.4kg/a区で高くなった(表-1)。

4. 成果の要約

安定した収量および品質を維持し、心白発現率を高めるためには、基肥窒素量は0.4kg/a程度が適当である。

(担当者 作物経営部 作物品種開発研究室 藤井真弓)

表 - 1 処理内容と生育・収量・品質

品種名	年次	基肥窒素 kg/a	追肥時期	稈長	穂長	穂数	玄米重	千粒重	倒伏	たんぱく質含有率	心白発現率	
				cm	cm	本/m ²	kg/a	g		%	%	
とちぎ酒14	H16	0.4	-15	91.0	19.9	320	65.0	27.3	0.3	6.9	-	
			-20	92.0	20.7	322	64.5	27.4	0.3	7.3	-	
			-25	90.9	20.9	319	67.7	27.4	0.0	6.8	-	
		0.6	-15	93.9	18.9	366	69.2	26.6	0.0	7.4	-	
			-20	94.6	20.2	342	67.1	27.0	0.3	7.4	-	
			-25	93.0	20.3	340	71.6	27.2	0.3	7.1	-	
	0.8	-15	101.1	19.1	387	64.2	26.6	3.3	7.8	-		
		-20	101.0	19.3	410	63.3	26.5	3.3	7.8	-		
		-25	101.6	19.7	375	63.0	27.0	3.5	7.6	-		
	若水		0.6	-20	90.1	20.3	366	67.0	27.1	0.0	7.8	-
	とちぎ酒14	H17	0.4	-15	97.9	19.3	294	60.0	26.7	0.5	7.1	53.2
				-20	97.8	20.1	297	60.8	27.0	1.0	7.3	55.0
-25				98.3	19.6	300	57.6	26.7	1.3	7.6	53.4	
0.6			-15	102.2	18.8	315	61.1	26.7	2.4	7.3	48.0	
			-20	103.5	19.2	315	55.8	26.3	2.5	7.4	47.6	
			-25	102.7	19.1	313	58.9	25.9	2.3	7.4	46.4	
若水			0.6	-20	97.9	19.8	349	56.5	27.0	0.0	8.0	93.6

注)1.倒伏程度は0(無)~5(甚)で表した。
 2.たんぱく質含有率はSi式GS2000で測定した。
 3.心白発現率は玄米250粒を観察した粒数比率。

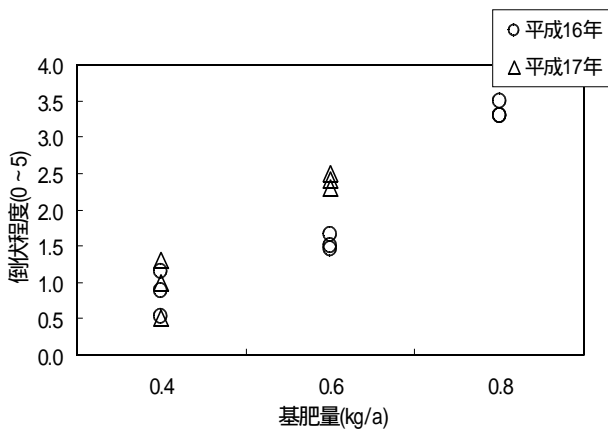


図 - 1 基肥量と倒伏の関係

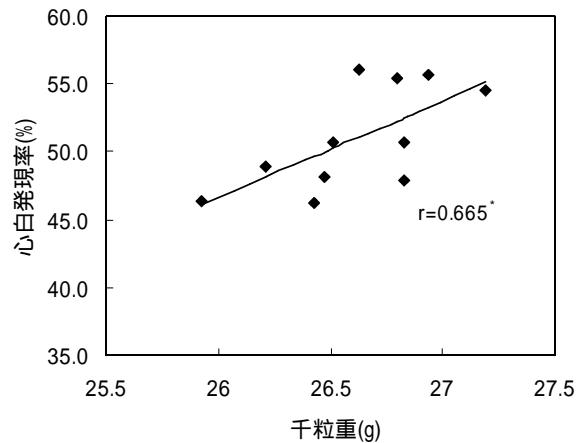


図 - 2 千粒重と心白発現率の関係

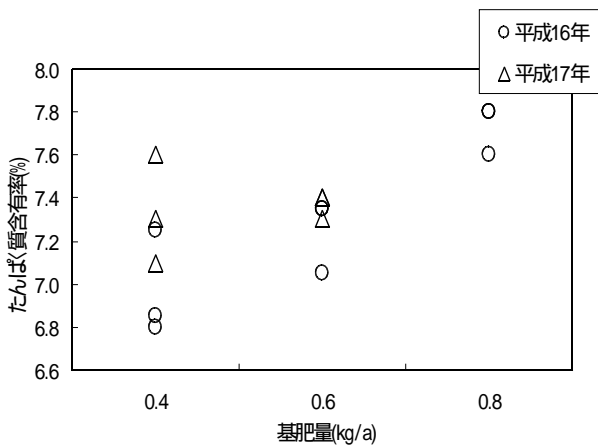


図 - 3 基肥量とたんぱく質含有率の関係